



Title	コーパスに基づく日本語慣用句の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	呉, 琳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12510号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65444
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Wu_Lin_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 呉 琳

	主査	教 授	池 田 証 壽
審査委員	副査	教 授	加 藤 重 広
	副査	教 授	藤 田 健

学位論文題名

コーパスに基づく日本語慣用句の研究

従来、日本語の慣用句に関する研究は、白石大二氏や宮地裕氏などによる先駆的研究があるものの、活発とはいえなかった。特に、定量的研究と定性的研究が日本語慣用句の研究にとって重要な意味をもつとされるが、このような研究はいまだ十分に行われていない。かつては、慣用句の数の多さや用例採集の困難さにより、数量的・意味的分析は難しかった。近年、コンピュータ技術の発達により様々なコーパスが構築され、このような研究が可能になった。本論文は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（2011年公開、1億430万語を収録）を始めとする各種日本語コーパスを基礎資料として、慣用句全体に関する調査から個別の慣用句に関する事例調査まで計量的な観点から日本語慣用句の使用状況を分析したものである。

本論文の研究成果としては、次の3点を挙げることができる。

第一に、朝日新聞記事データベースや『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から基本慣用句の調査を着実にを行い、使用度数の分布状況を解明した点である。朝日新聞記事データベースは、1986年1月1日から2015年12月31日まで30年間の記事を、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は書籍サブコーパスのなかで、哲学や歴史などジャンルが明示された9つのジャンルを実際に調査した。大規模コーパスは慣用句の使用度数調査に利便性を提供できるものの、慣用句のなかで助詞が変わることや構成要素の間にほかの要素が介入すること、または文字通りの意味を表し得ることなど問題点もある。申請者本人もそれらをよく理解したうえで丹念に調査を行い、立論は説得力を持っている。

第二に、慣用句がいくつかのジャンルにわたって出現するかを表す「広さ」と、使用度数の多寡を表す「深さ」を基準にして慣用句の基幹度を測って基幹慣用句を選定したことは、林四郎氏が提唱した「基幹語彙」の概念を慣用句の研究に応用・発展させたもので、従来の慣用句研究になかった観点であり、画期的成果と評価できる。日本国内で英語のイディオム・慣用句に関する辞典・参考書が多数刊行されていることから分かるように、外国語習得において慣用句をマスターすることはより実践的な課題である。基幹慣用句の選定は日本語教育ばかりでなく、日本人の児童や学生のための国語教育にも応用可能な大きな成果である。

第三に、慣用句の意味変遷について、国語辞典における意味記述を踏まえ、近現代の日本語コーパスを調査し、変遷の過程と要因を記述した点である。頻繁に文化庁による「国語に関する世論調査」において慣用句が取り上げられることから分かるように、人々は慣用句の使用へ高い関心を持っている。しかし、世論調査に代表される各種言語調査は、慣用句の使用意識に関するものであり、使用実態までは解明できない。本論文は、各種コーパスを総合して通時コーパスとしてとらえ、慣用句意味ごとの用例数を通時的に考察することにより、意味変遷の過程を跡付けた。慣用句辞典の意味記述や用例選択を精緻化するのに有益な情報を提供することが期待される。

本論文の取り扱う資料には、朝日新聞社『聞蔵Ⅱビジュアル』をはじめとする各種新聞記事データベースや『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『分類語彙表一増補改訂版』などがあり、特に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『分類語彙表一増補改訂版』は、近年国立国語研究所による日本語学研究の大きな成果である。本論文はそれらの活用事例としても意義が大きい。

申請者は、日本語学・日本語教育の分野で評価の高い学術誌に掲載済みや採択済みの論文をあわ

せて十編、アメリカ、オーストラリア、中国、台湾の国際学会にて口頭発表を行い、十分な実績を重ねている。

また、本論文に示された日本語の分析力と論述力が極めて高い水準にあることは特筆される。

審査を通して明らかになった問題点としては、慣用句の定義と数量的分析とに関して、より丹念かつ精確な説明が期待される点が指摘されたが、これは今後の研究によって十分に解決が可能である。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。